

要旨

85 篇を含む『論衡』には、1150 の人物が取り上げられたが、周文王と周武王を言及したものは 41 篇にも上る。その中で、周文王・周武王を言及したのは 218 回と多い。作品に描かれた「人物」はその作者の「思想の根拠」を表している、また、作品に語られた「思想の根拠」はその作者の「思想」を映している。では、王充は周文王と周武王を論じる際、どんな「思想」及び「思想根拠」を証明しようと思っていたのか。本論文は、「語彙の分布」・「物語の類型」のデータ分析に基づいて、この問題の解明を試みた。

本稿は先行研究を分析する第 1 章から本研究の結論を推論する第 7 章まで計 7 章構成している。各章の主な内容は以下にまとめる

第 1 章では、王充に関する先行研究について分析を行った。その結果、これまでの王充に関する研究は主に「篇目読解」という方法を用いて、王充思想における「唯物主義の自然観」、「客観天命論」、「気一元論」、「莫為説」、「宿命論（命定論）」、「無鬼神論」、「虚妄」への批判、「合理主義」或いは「理性主義」などの思想に集中し、議論を展開されていた。しかし、論議されているのは王充思想のすべてなのか、また、その「篇目読解」以外に効果的な研究方法はないのか。これらの問題は先行研究から遺留されたと言える。本研究は「語彙の分布」「物語の類型」を分析することを研究方法として、『論衡』に多く語られた周文王・周武王をピックアップし、二人の「人物」に託された王充の「思想」を推論・分析することにした。

第 2 章では、『論衡』以前の周文王・周武王についての記述を分析した。周文王・周武王について、最も早く記載したのは『尚書』であり、最も詳しく記載したのは『史記』である。主にこの 2 つを材料に分析した結果、異なる史料では異なる周文王・周武王像が描かれている、具体的に、「特異」「吉兆」「天命」「寿命」に関する「人物像」は類似しているが、「運命」「行動」「軍事」「政治」「思想」に関する「人物像」は史料によって異なっていたことが分かった。

王充は『論衡』を論じる際、第 2 章で分析した史料をどのように引用したか、或はどんな意図をもって史料に語られた「人物像」を取捨したか、王充の周文王・周武王像はどんなものか、第 3 章、第 4 章ではこれらの問題を解明することに試みた。「語彙の分布」（第 3 章）、「物語の類型」（第 4 章）の分析データから、①王充の周文王・周武王像は「特異」「吉兆」「天命」「寿命」「運命」「行動」「政治」の 7 類型において、基本的に史料と一致しているが、「軍事」「思想」の 2 類型において、史料と一致していない。さらに、②『論衡』

には「身分」という新たな類型の物語があり、その「身分」から見えたのは「聖人」である周文王・周武王像である、ということが読み取れた。

第5章では、王充の周文王・周武王の「聖人」像から見えた王充の「思想」について分析を行った。以下の結果を得ることができた。①伝統文化における早期の「聖王」は「道統」と「政統」という2つの系統に分けられたが、その後は、この2種類の系統が「同質化」され、或はまったく同様に描かれるようになった。王充の「聖王」像には「道德聖王」、「功績聖王」、「革命聖王」という3種類がある。②王充はそれまでの「聖人」についての思想を継承しながらも、「脱神化」或は「脱宗教化」という「思想」の面では、「聖王」論を発展させた。③王充の「聖王論」では、同じ「聖王」であっても、「道德聖王」である周文王は「革命聖王」である周武王の上にいる。

第6章では、王充の「聖王論」の思想的基礎について探ってみることにした。その結果は、「聖王論」の思想的基礎は「客観天命論」であり、その思想方法は「矛盾律」であることを明らかにした。また、王充の「聖王論」にある「脱神化」「脱宗教化」は彼の「批判論」の有力な根拠となり、後世に大きな影響を与え、後に「政治の批判精神」と変化した。

本研究の成果は以下の2点である。①王充の思想体系における重要な観念の1つとして、「聖王論」を発見した。②王充研究における新たな視点、新たな研究方法として、「語彙の分布」・「物語の類型」についてのデータ分析によって、王充の「思想根拠」及びその「思想根拠」を証明する過程を探るという研究方法を提案した。

本研究は「周文王」「周武王」をキーワードとして取り上げ、王充がこの二人の「人物」に託した「聖王論」思想を見出した。その「聖王論」はほかの人物像にどう反映されているか、異なる「人物」であっても、「聖王論」という「思想」が不変であるか、これらの問題は王充の「聖王論」思想を追究するには欠かせない。これは今後の課題としたい。